

開倫塾ニュース 6月号御送付の御案内

### 「学習の3段階理論」とは

開倫塾

塾長 林 明夫

今秋創立 30 周年を迎える開倫塾では、一人ひとりの塾生の皆様に確かな学力を身につけて頂くために、開塾以来「自己学習能力の育成」を教育目標にして、「学び方」の指導も行っております。その内容はどのようなものか、今月の塾長通信でお示し致しますので、どうか熱心にお読み下さいますようお願い申し上げます。

1. はじめに、開倫塾では効果の上がる勉強方法として、「学習の3段階理論」をお勧めしています。
2. 学習の3段階理論では、学習を「理解」、「定着」、「応用」の3段階に分けて具体的方法を考えます。
3. (1)理解とは、学習している内容が「うんなるほどとよく分かること、腑(ふ)に落ちること」を言います。  
  
(2)理解は、学校や開倫塾などの「授業」と、一人で行う「自習」で行われます。  
  
(3)授業で、学習している内容を理解するためには、まずは「手を机の上に置き先生の目を見て授業をよく聞くこと」、また、「授業に積極的に参加すること」が求められます。  
  
(4)先生が黒板に書いたことや、お話しになったことなど「必要なことをすべてノート(メモ)」することも、理解のためには大切です。このノート(メモ)は、「利用しやすいように整理」することも理解のために大切です。  
  
(5)学校や開倫塾の「授業での理解を妨げるもの」は、「欠席」、「遅刻」、「早退」、「忘れ物」、「居眠り」、「ボーッとしていること」、「徘徊(はいかい)」、「携帯電話」、それに「おしゃべり(私語)」などです。これらをなぜ避けた方がよいかといえ、授業での理解の妨げになるからです。先生がいくら熱心に準備をし、熱心に授業をしても、これらがあつては理解は難しいと言えます。
- (6)理解は、一人で行う「自習」でもできます。自習では、学校や開倫塾の教科書・テキストや資料集、問題集とノート(メモ)を用いて、理解つまりうんなるほどとよく分かること、腑(ふ)に落ちることを目指しましょう。

(7) 語句の意味がよく分からないときには、積極的に辞書や参考書、事典などを活用しましょう。調べた内容はその都度(つど)ノート(メモ)しておきましょう。

(8) 学校の「図書室」や、県や市町などの「図書館」も十分に活用しましょう。

(9) 以上のような方法で一度学習した内容を復習すると同時に、これから学習する内容を予習することをお勧めします。予習は何のためにするか。「予習は、分からないことを予(あらかじめ)めはっきりさせて授業に臨むために行う」ためにすべきものです。予習は、誰に遠慮することなく、どんどんしましょう。

4. 学習の第2段階は、定着つまり「身につける」ことです。

(1) 定着とは、「学校や開倫塾の授業や一人で行う自習で十分に理解できた内容を、正確に身につける」ことを言います。

(2) 定着にも3つのステップがあります。

(3) 第1は、「一度理解した内容がスラスラ口をついて正確に言える」までにすることです。これは「暗誦(あんしょう)」とも言います。このために最も役に立つのが、「音読練習」つまり「何回も、何十回も、繰り返し声に出し、正確に読む練習」です。

(4) 第2は、「一度うんなるほどと理解した内容を楷書(かいしょ)で正確に書ける」までにすることです。これは「暗記」とも言います。このために最も役に立つのが、「書き取り練習」つまり「何回も、何十回も、繰り返し楷書で正確に書く練習」です。

(5) 第3は、「一度理解した計算や問題を、その計算や問題を見た瞬間(しゅんかん)に条件反射(じょうけんはんしゃ)でパツ、パツと正解が出る」までにすることです。このために最も役に立つのが、「計算・問題練習」つまり「同じ計算や問題を繰り返し正確に解き、計算や問題を見た瞬間に条件反射でパツ、パツと正解が出るまでにする練習」です。

(6) 定着のための3つの練習を、「定着のための3大練習」と呼んでいます。

5. 学習の第3段階は、応用つまり「応用できる」ことです。

(1) 応用とは、「十分理解し、定着させた内容を応用できること」を言います。

(2) 応用には3つのステップがあります。

(3) 第1は、「学校の定期テストで100点満点が取れること」です。そのためには、「深く狭くに徹する」ことです。まずは早めに「試験範囲を推測」すること。次に「何で勉強するのか教材を決定」すること。最後は、その「教材を十分理解」した上で、「定着のための3大練習」を徹底的に行うことです。

(4)第2は、「入学試験や検定試験、資格試験、国家試験、採用試験等で合格点が取れる」までにすることです。そのためには、「出題科目の全領域にわたって応用の第1ステップの深く狭くに徹することで、学校の定期テストで100点満点が取れるレベルにまでする」ことが求められます。

(5)その上で、「過去問」つまりその「試験で過去に出題された問題」を練習すること。これを「過去問練習」と言います。過去問練習は、最低でも5年分すること。できれば10～15年分すること。また、同じ年度の問題を最低5回繰り返して練習することが大切です。

過去問練習の際には、「誤答分析(ごとうぶんせき)」つまり「何が原因で間違ったのかを分析すること」が求められます。学習の3段階のうち、どの段階が原因かを自分で推測し、どうしたらよいかを考えましょう。

- ・理解が不足であれば、教科書・テキストや資料集、問題集、ノート(メモ)を、辞書や参考書、事典を用いてうんなるほどよく分かること、腑(ふ)に落ちることまでにすることです。
- ・理解はしているが定着が不足のために誤ったのであれば、定着のための3大練習を徹底的に行うことです。よく覚えていなければ音読練習を。正確に書けなければ書き取り練習を。計算ミスなら計算練習、パターン練習不足なら問題練習を。
- ・出題科目の全領域にわたって、学校の定期テストで100点が取れるレベルにまでもっていく。出題科目の全領域を十分理解した上で、定着のための3大練習により定着が行われるならば、大方の試験で合格点は取れます。
- ・但し、難しい試験に臨む場合には、学校の教科書レベルでは不足なので、定評ある参考書、定評ある問題集をスミからスミまで6回以上、できれば10回以上徹底的に繰り返すことが合格の秘訣と言えます。

(6)応用の第3は、「社会で役立つ」ことです。社会で役立つためには、「鍵になるような基本的な学力・能力(キー・コンピテンシー)」を一生涯かけて身につけるよう努めることが求められます。「キー・コンピテンシーズ」は何のために必要かといえば、「一人ひとりの人生における成功」と、「持続可能な社会の形成」のためと考えられます。

(7)「学校時代に身につけた学力」を基本に「一生涯をかけて身につけるべき鍵になるような基本的学力(能力)」とは、次の3つです。

- ・その1は、知識、情報、技術を相互作用的に用いる能力 (知識基盤社会に対応)
- ・その2は、多様な集団で交流する能力 (グローバル化社会フラット化した社会に対応)
- ・その3は、自律的に活動する能力 (超高齢化社会、大不況の社会に対応)
- ・以上1～3の条件となる能力とは  
「Learning To Learn(ラーニング・トゥ・ラーン)」学び方を学ぶ能力  
\*「自己学習能力」を身につけよう  
「読書」による熟慮・熟考・省察する能力  
\*「書き抜き読書ノート」をつくらう

新聞を読んで考え批判的思考能力(Critical Thinking クリティカル・シンキング能力)を身につけること

\* 小学生は 20 分、中学生は 40 分、高校生は 60 分、新聞を毎日読んで考えよう。

6 . 御参考 - 学習についての考え方 -

- ・ 初心忘るべからず (世阿弥先生)
- ・ 持続する志(こころざし) (大江健三郎先生)
- ・ 田舎(いなか)の 3 年、京の 3 日 (司馬遼太郎先生)
- ・ 一所懸命(一つの所で命を懸けるくらい熱心に取り組もう)
- ・ 練習は不可能を可能にする (小泉信三先生)
- ・ 教育ある人とは一生勉強し続ける人 (ドラッカー先生)
- ・ 一生勉強、一生青春 (相田みつを先生)

以上

- 2009 年 4 月 30 日林明夫記 -